



TITLE:

高麗朝における杜詩受容：李奎報を中心として

AUTHOR(S):

鄭, 埜謨

CITATION:

鄭, 埜謨. 高麗朝における杜詩受容：李奎報を中心として. 中國文學報
2005, 69: 154-178

ISSUE DATE:

2005-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177953>

RIGHT:

高麗朝における杜詩受容

——李奎報を中心として——

鄭

培

謨

京都大学

はじめに

韓國の古典文學は中國文學の影響を受けながら發展して來た。數多い中國詩人の中でも杜甫ほど韓國文學に影響を與えた詩人はいない。しかし、杜甫の詩集が朝鮮半島にいつごろ傳わつてきたかは未だ明確ではない。高麗宣宗二年（二〇八五）に宋から杜甫の詩を二百餘首收める『文苑英華』が贈られたことから、高麗前期（九三六―一二六九）にはすでに杜甫の詩の一部が傳わつていたことは確かである。今日、目にするこのできる高麗の文獻の中で、杜甫に關する記事として初めて確認されるのは、高麗仁宗二十年

（一一四二）の進士科に合格した林宗庇が書いた文章の「書は杜陵の萬卷を破らんと欲す」（『東文選』卷四十五「上座主權學士謝及第啓」という記述である。その後、林宗庇の甥である林椿（一一四八―一一八六）になると「少陵の高峭、李白をして其の藩を窺う莫からしむ」（『西河集』卷六「上按部學士啓」と評するなど、杜甫の名及び杜詩評價のことがより頻繁に取りあげられるようになる。杜甫にかかわるこれらの言及は、杜詩が十二世紀半ば頃には高麗朝に受容されていたことをもの語っている。

高麗中期（一一七〇―一二五九）の代表的な文人李奎報（一二六八―一二四一）に到ると、杜詩への高い評價と共に實際の作詩において杜詩の句法を活用するなど、杜詩を學習していた状況がより具體的に窺えるようになる。彼は杜甫の一連の草堂詩への次韻を試み、また杜甫の詩句を典故として使い、その詩句の典據を自注に記している。李奎報の杜詩にかかわるこれらの作品は、當時の杜詩受容がいかなる状況であつたのかを知る手がかりとして注目にあたいる。

しかし、これまでの高麗朝における杜詩受容の研究では、

主に北宋詩話の影響を受け高麗中期に編まれた李仁老（一一五二—一二二〇）の『破閑集』と崔滋（一一八八—一二六〇）の『補閑集』での杜詩評價を引用するに止まり、李奎報と杜詩との関わりにあまり注意が拂われていなかった。そのために、李奎報を始め當時の詩人たちにおける杜詩受容の具體的な様相が明らかにされなかった。

高麗朝における杜詩受容史の研究の一環として位置づけられる本稿では、杜詩が具體的に受容される高麗中期、その中でも特に李奎報の壯年時代における杜詩受容に焦點を絞って検討を進め、當時の詩壇における杜詩受容の一端を明らかにしたい。

一 李奎報以前の杜詩受容

韓國でいつごろから詩文が作られ始めたかは明確ではないが、遣唐使が派遣された八世紀以後になると、唐の文化を積極的に學んできた留學生たちを中心に詩文が頻繁に製作される。しかし、現在遺された彼らの詩文からは杜詩を

受容した跡が見られない。

高麗朝の成立以後もしくは中国から歸ってきた留學生たちが詩文の主な擔い手であったが、高麗光宗九年（九五八）から詩文の實作を要求する新しい科擧制度が實施され、それによって、文學を擔う文人達の擴大とともにその文學水準も大きく引き上げられた^③。また成宗十四年（九九五）からは文臣らに毎月自作の詩賦を提出させるとい、いわゆる文臣月課法が實施されるなど、官僚になってからも繼續的に文學的創作が要求されたことも高麗前期の詩文學の發展と結びついたであろう。文宗二十五年（一一〇七）には、暫らく途絶えていた北宋との國交が再開された。従って一定の文學的素養を備えた使者たちの頻繁な往來、またそれに伴う書籍などの迅速な傳來により、北宋詩壇の動きがより早く高麗朝に伝えられたことは想像に難くない^⑤。

それでは、當時の北宋詩壇での杜詩の評價及びその普及はどのような状況であったのだろうか。北宋の中期頃になると、杜詩に對する評價は段々と高まり、それに伴って杜詩は廣く普及し始めた。王安石は杜詩の詩語が優れた點を

評價し、「杜甫の詩を學びつくせないことを惜しんだ」と言^⑥い、蘇軾は杜甫の忠孝の面を評價して、「たとえ一飯にしても君主を忘れたことがなかった」と強調した^⑦。また秦觀は、「杜甫の詩はあらゆる詩人の長所を集めた」として徳の大成者たる孔子と同等視するなど、杜甫の評價はほぼ「詩聖」の地位にまで高まっていた^⑧。杜詩への関心の高まりとともに杜甫の詩集も整理され、刊行されるようになった。中でも、寶元二年（一〇三九）王洙が『杜工部集』を編み、嘉祐四年（一〇五九）に王琪が王洙本をもとに諸家の杜詩集を参照して改訂版をつくり、これを刊行して流布させたことが重要な業績として挙げられる^⑨。

さて、北宋詩人とその詩壇への関心が強かった高麗朝、特に李奎報以前の詩壇における杜詩受容の状況はどうであったのだろうか。

現在、李奎報の前の時代に活躍した文人の作品はほとんど失われ、遺された僅かの文献資料だけでは當時の文壇の實態を詳しく知ることが難しい。ただ、朝鮮前期に徐居正（一四二〇—一四八八）等によって編まれた『東文選』に收

められた作品と、高麗中期の詩話『破閑集』と『補閑集』に載せられた斷片的な記事を通じて、僅かながらも當時の詩壇の様子を窺うことができる。これらの文献の中には、幸いにも杜詩に関わる記述が斷片的ではあるが、遺されている。そのころの杜詩受容の様子を伝える資料として、まず朴公襲に関する逸話を挙げてみよう^⑩。

朴君公襲居貧嗜酒。客至無以飲、求酒於靈通寺僧、用罈腹山罈、盛以泉水、封纏甚牢固送之。朴公初見喜曰、「此器可受二斗許、昔陳王斗酒十千宴於平樂。杜子美亦曰、還須相就飲一斗、恰有三百青銅錢。今吾二人不費一錢、而得美酒、各飲一斗、則酣適之興不減於古人」……（『破閑集』卷下）

朴君公襲貧に居り酒を嗜む。客至るも以て飲む無し。酒を靈通寺の僧に求むるに、罈腹の山罈を用いて、盛るに泉水を以てし、封纏すること甚だ牢固にして之を送る。朴公初め見るに喜びて曰く、「此の器一斗許^{ばかり}を受くべし、昔し陳王は斗酒十千もて平樂に宴す。杜子

美も亦た曰く、還た須らく相就きて一斗を飲むべし、
恰も有り三百の青銅錢。今吾二人一錢を費やさざるに、
美酒を得て各々一斗を飲めば、則ち酣適の興 古人に
減ぜず」……。

ここで朴公襲が引用する杜甫の詩は「偏側行贈畢四曜」
〔杜詩詳註〕卷六の最後の二句である。この記述だけを見
ると當時の高麗の人々がすでに杜甫の詩集を讀んでいた
ようにも思われるけれども、この句は唐の時代の酒の値段
を記した「詩史」的な例として、北宋の士大夫にとっては
なじみのものであったようだ。たとえば、北宋の劉放の
『中山詩話』には次のように見える。

眞宗問近臣唐酒價幾何、莫能對。丁晉公獨曰、斗直三
百。上問何以知之、曰、臣觀杜甫詩、速須相就飲一斗、
恰有三百青銅錢。亦一時之善對。

眞宗近臣に唐の酒價幾何かと問うも、能く對えるな
し。丁晉公獨り曰く、斗三百に直たると。上問う何を

高麗朝における杜詩受容（鄭）

以て之を知るか、曰く、臣杜甫の詩を觀るに、速や
かに須らく相就きて一斗を飲むべし、恰も有り三百の
青銅錢。亦た一時の善對なり。

引用される杜詩についてはテキストによって異同が見ら
れる。宋本『杜工部集』では「速宜相就飲一斗、恰有三百
青銅錢」と、詩話での「速須」のところが「速宜」となっ
ているのは興味深い。意味においてはそれほど差が無いが、
宋本『杜工部集』が「速宜」に作るのに對し、『中山詩話』
では「速須」、『破閑集』では「還須」となっている。『破
閑集』だけが「還須」となっているのは轉寫の過程で起こ
った誤りかも知れないが、字體についていうならば、『破
閑集』の「還須」はどちらかといえば『中山詩話』の「速
須」に近い。とすれば、『破閑集』に引かれた朴公襲の逸
話に見える杜詩は、杜甫の詩集から引いているのではなく、
もともと詩話などの二次的な資料から引かれた可能性がよ
り高いと思われる。

次に吳廷碩の七言律詩、「山村海棠」（『東文選』卷十三）

を取りあげてみよう。^⑫

可堪工部終無詠 工部終に詠ずる無きに堪ふるべし

不是昌州獨有香 是れ昌州の獨り香有るにあらず

杜甫はあらゆる花について詩を作ったものの、海棠に關する詩だけは作らなかつたようである。これについては唐代から既に指摘があり、北宋の詩話でも話題としてよく取り上げられてきた。^⑬ 杜甫と海棠との關係は、詩のよい素材として北宋の詩人の詩にもよく取り上げられた。たとえば、

王禹偁の「送馮學士入蜀」(『小畜集』卷七)には、「莫學當年杜工部、因循不賦海棠詩」(「學ぶ莫かれ當年の杜工部、因循して海棠の詩を賦さざるを」と歌われ、また王安石の「與微之同賦梅花得香字三首」其二(『臨川先生文集』卷二十)

にも、「少陵爲爾牽詩興、可是無心賦海棠」(「少陵爾が爲に詩興を牽かれる、是れ心の海棠を賦す無かるべけんや」と、杜甫と海棠との關係が歌われている。

吳廷碩もこの詩の中で杜甫が海棠の詩を作らなかつたこ

とを歌っている。吳廷碩が杜甫の詩集を通覽した上で、杜詩に海棠の歌がないことに氣づいたとは考え難い。やはり北宋詩人の詩集か詩話から得た知識であつたのだろう。

吳廷碩より後の林椿(一一四八—一一八六)に至つては、

杜甫に關わる記事が頻繁に取り上げられるようになり、中でも杜詩評價に關する記事が目立つようになる。彼は「次前韻奉答二首」其二(『西河集』卷三)で「詩の妙なること誰か杜に如かんや、書の奇なるは又た顔に止まる」と評し、また「謝金少卿啓」(『西河集』卷六)では、金少卿を評したところで、

書止顔、文止韓、詩止杜、學無不窺、其威名之所及也。書は顔に止まり、文は韓に止まり、詩は杜に止まり、學窺わざる無く、其の威名の及ぶ所なり。

と、顏真卿の書、韓愈の文と並び、杜甫を詩における最高の人物として取りあげている。しかし、林椿のこの杜甫への評價は、北宋の詩話でよく取りあげられる蘇軾の評語を

ふまえている。^⑮ もとになるのは蘇軾の「書吳道子畫後」
〔『東坡集』卷二十三〕の次の部分である。

故詩至於杜子美、文至於韓退之、書至於顏魯公、畫至
於吳道子、而古今之變、天下之能事畢矣。

故に詩は杜子美に至り、文は韓退之に至り、書は顏魯
公に至り、畫は吳道子に至りて、古今の變、天下の能
事畢れり。

このように、林椿の杜詩評價にかかわる記事も北宋詩人
中でも特に高麗朝の詩壇に大きな影響を及ぼした蘇東坡の
杜詩評價を借用していることが分かる。常に中國詩壇の動
きに敏感であつた高麗詩人たちは、杜詩の受容においても、
北宋の中期以後に高まつた杜詩評價の影響を受けていたの
である。

以上のごとく、北宋で高まつた杜詩に對する評價は、詩
話や個々の文人の詩集を通じて高麗にも傳わつていたと思
われ、十二世紀半ば頃には、高麗詩人の間でも杜詩評價を

高麗朝における杜詩受容（鄭）

始め、杜詩にかかわる記事がよく言及され始めたのである。
しかし、それらの言及は、自ら杜甫の詩集を閲覽して得ら
れた獨自の見解であつたとは言ひ難い。言い換えれば、李
奎報より前の時代までは、杜詩から直接的に影響を受けた
のではなく、北宋の詩話などの媒介によつて杜詩が間接的
に受容されていた時期であつたと言わざるを得ない。

二 李奎報における杜詩受容

1 杜詩句法の學習

武士政權が實權を握つた高麗中期九十年の間、詩人の別
集が幾つか編まれたが、現在まで傳わるのは林椿の『西河
集』六卷と李奎報の『東國李相國集』五十三卷のみに止ま
る。中でも詩文二千餘首、散文七百餘篇に上る膨大な作品
を載せる『東國李相國集』は、^⑯彼自身によつて編年され、
年齢とともに變化する文學活動をうかがい知ることができ
るのだが、同様に彼の杜詩受容の變遷も讀み取れるのが興
味深い。『東國李相國集』に載せられた李奎報の若い頃の

詩を讀んでいくと、杜詩の句法に學んだと思われる幾つかの詩が目につく。まずは明宗二十三年（一一九三）、すなわち李奎報が二十六歳の頃の作品の中、酷い寒さを諧謔的に歌った「苦寒吟」（『東國李相國全集』卷二）を検討して見よう。

吾非孔墨賢

吾 孔墨の賢に非ざるに

胡爲突不黔兮席不暖

胡爲れぞ突黔からずして席暖ま

妻兒莫啼寒

妻兒 寒に啼く莫かれ

吾欲東伐若木燒爲炭

吾は欲す 東のかた若木を伐し

爰遍吾家及四海

爰^{あゐ} 遍ること吾家と四海に遍く

臘月長流汗

臘月にも長しえに汗を流させん

ことを

この詩はまず、世の中を正すために走りまわったという聖賢孔子と墨子の故事を挙げ、自分と對比させる。そして

寒さに耐えられずに啼く妻子に對し、神仙の山にあるという若木を伐つて焼いて炭をつくり、我が家だけではなく、世界中の全てを炙り焼き、いくら寒い十二月であつてもさんざん汗を流し續けさせたいという。厳しい寒さの中、自分の力では及ばない實行不可能な願望を述べて慰める巧みな句法である。

こうした句法はすでに杜甫が「茅屋爲秋風所破歌」（『杜詩詳註』卷十）で、草堂のかやぶきの屋根が秋の風に飛ばされ、部屋中が雨漏りして眠れない夜、切實に自分の願望を述べるときに使っている。李奎報の詩は特にこの杜甫詩の最後の段落である次の句、

安得廣厦千萬間

安んぞ得ん廣厦千萬間

大庇天下寒士俱歡顏

大いに天下の寒士を庇いて俱に歡顏し

風雨不動安如山

風雨にも動かず安きこと山の如し

の表現技法を借りていることが分かる。李奎報はまたほぼ同じ時期に作った「題晉秀才別墅」（『東國李相國全集』巻二）で、晉秀才の別荘の様々な側面を描きだした後、最後の段落においてこの別荘にはただ綺麗に流れる水が缺けているとして、次のように歌っている。

安得長梯萬丈矗 安んぞ長梯の萬丈矗を得て

直注天潢亘相續 直ちに天潢を注ぎ亘に相續かしめ

ん

ここで彼は萬丈にも及ぶ長い梯を使って天の河の水を引きたいものだと、適わぬ願望を述べながらこの一首の詩を終えている。「安得」ということばを使って自分の適わぬ願望を語るのには、前の「茅屋秋風の破る所と爲る歌」でも見られたように、杜甫が得意とし、またよく使っていた句法である。上の李奎報の句は、「安得」を用いた杜甫の詩句の中でも、特に「望岳」（『杜詩詳註』巻六）の第三・四句目の、

安得仙人九節杖 安んぞ仙人の九節杖を得て

拄倒玉女洗頭盆 拄げて玉女の洗頭盆を倒さん

を巧みに應用していることが分かるだろう。

最後にもう一つ杜詩の字句をほぼそのまま借りて使った例を舉げてみよう。これもまた李奎報が若かった二十六歳のときに作った「吳德全東遊不來、以詩寄之」（『東國李相國全集』巻一）の詩である。この詩の中でも特に三・四句目での「黃稻日肥雞驚喜、碧梧秋老鳳風愁」（『黃稻日々肥えて雞驚喜び、碧梧秋に老いて鳳風愁う』）は、杜甫の「秋興八首」其八（『杜詩詳註』巻十七）の同じ三・四句目での「紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝」（『紅稻啄みて餘す鸚鵡の粒、碧梧棲みて老ゆ鳳凰の枝』）を詩語の面ではほとんどそのまま使っていることが分かる。¹⁵⁾

以上のように李奎報が若い頃から杜詩のこうした句法を學習し、時には杜甫の詩句を意識的にまねて實作に應用していたことが窺える。李奎報の若い頃の杜詩の學習に關しては、まず北宋詩壇の影響を強く受け杜詩を高く評價した

前の世代、すなわち林椿ら先輩詩人の杜詩受容の影響を指摘しなければならぬ。しかし、杜詩の表現技法そのものに注目して詩作に活用した彼の受容の態度は、先輩詩人のそれと明らかに異なっている。

2 典故としての杜詩句

李奎報は杜詩の句法を學習してそれを自身の詩作に活かし、ときには杜甫の詩句から故事を引いて詩を作っていた。興味深いことに、彼の幾つかの詩の中で、使った杜詩の句にわざわざ自注を記している。これらの自注は當時の杜詩受容の状況を知る手がかりとして注目に値する。まず、高麗明宗二十三年（一一九三）、すなわち彼が二十六歳の頃に作った詩「呈崔祕監誥」（『東國李相國全集』卷三）について検討してみよう。

……

鳳穴毛新好 鳳穴 毛 新たに好し（嗣子宗梓訪予、

故云）

蝸廬訪可慙 蝸廬 訪れること慙ず可し

醉看紅蜃筆 醉いて看る紅蜃の筆

出逐紫鸞驂 出でて逐う紫鸞の驂（時崔君作詩後、勸

予往其宅）

破袖懷毛紙 破袖 毛紙を懷き

高門殿玉簪 高門 玉簪を殿とす

蘭誇庭下秀 蘭 誇りて庭下に秀で

珠媚掌中貪 珠 媚でて掌中に貪る（指言崔家諸子。

杜詩云、掌中貪看一珠新）

……

李奎報は「珠媚掌中貪」の句に自注をつけ、典據となる杜甫の詩句を記している。高麗中期は詩を作るにあたって、典故の使用、すなわち「用事」の重要性が唱えられた時代であり、典故を巧みに使いながら次韻することに精力が注がれた。たとえば、李奎報がこの詩の二年あとに、吳世文の三百韻詩に次韻して作った詩「次韻吳東閣世文呈誥院諸學士三百韻詩并序」（『東國李相國全集』卷五）の「跋尾」に、

吳公之詩、皆挾古事、又欲觀予押強韻處、俾皆挾注。

予恐後人譏謗、故皆刪去之、唯存略注。

吳公の詩、皆古事を挾み、又予が強韻を押す處を觀んと欲して、皆な注を挾ましむ。予 後人の譏謗するを恐れ、故に皆な之を刪去して、唯だ略注を存すのみ。

と、説明している。李奎報は吳世文の三百韻の詩へ次韻したとき、始めは強韻のところのほぼ全ての詩句に注を付けていたが、後世の人々の批判の對象になりそうなものは後に自ら削ってしまったという。當時は「強韻」のところ、つまり韻字のために無理やりに典故が引かれたところには「用事」としてどの文獻から引いて使っているのか、相手にその典據を示すためにわざわざ自注をつけたのであって、またそのような注が他者から求められていたことが分かる。さて、李奎報の「呈崔祕監諒」詩の注に記された杜甫の句は、次の絶句「戲作寄上漢中王」二首（「杜詩詳註」卷十二）の第一首、第二句目にあたる。

高麗朝における杜詩受容（鄭）

雲裏不聞雙雁過	雲裏 雙雁の過ぐるを聞かず
掌中貪看一珠新	掌中 一珠の新なるを貪り看る
秋風嫋嫋吹江漢	秋風嫋嫋として江漢を吹き
只在他詎何處人	只だ他詎に在るは何處の人ぞ

これは廣徳元年（七六三）杜甫が梓州で作った詩であり、宋本の原注には「王新たに明珠を誕えて」として作詩の背景が記されている。新たに生まれた子供に夢中になり、自分には何の連絡もくれない漢中王に戯れに作って贈った詩である。李奎報の「珠媚掌中貪」の句は、杜甫の詩句を知る者であれば、すぐその意圖するところが読み取れ、韻字として「貪」が使われていることに何の抵抗感を覺えないだろう。しかし、杜詩の句を知らなければ、押韻した「貪」の字に一瞬戸惑うかも知れない。すなわち、當時の一般的な文人たちは李奎報ほど杜詩に習熟していなかったのであり、そうであればこそ、李奎報はわざわざ自注を付けたのである。李奎報の活躍した高麗中期ころの詩人たちのほとんどは、杜詩を典據とした詩の意味を、注なくして

はまだ十分に理解できないという状況であつたと言える。

杜詩が注されたもう一つの例をあげてみよう。高麗神宗元年（一一九八）、すなわち李奎報が三十一歳の頃の作品「次韻聆首座寄林工部并序」（『東國李相國全集』卷八）である。序には詩を作った背景が次のように説明されている。

予昨詣方丈。師偶言曰、「禮山香川寺、是吾之舊居也、爲賊兵所歷、頽沒已久。故人林工部巡按此郡、俾郡宰陳君具材營葺。予以詩謝之、子亦可廣和耶。」因出其詩示之、卽和成一首奉呈。

予 昨方丈に詣る。師偶たま言いて曰く、「禮山の香川寺、是れ吾の舊居なり。賊兵の歷する所と爲り、頽沒すること已に久し。故人林工部、此の郡を巡按するに、郡宰の陳君をして材を具え葺を營ましむ。予 詩を以て之に謝す、子も亦廣^{つく}いて和すべけんや。」因りて其の詩を出して之に示す。卽ち和して一首を成して呈し奉る。

僧侶の聆首座が以前起居していた禮山の香川寺は荒れ果ててしまつたが、友人の林工部が郡宰の陳君に頼んで修繕してくれるので、これに感謝して詩を贈つたという。李奎報は聆首座からその詩への次韻を求められたので、その場で直ちに唱和して奉つたというこの「次韻聆首座寄林工部」詩は、その修繕の経緯を述べた長編古詩である。彼はこの詩の後半部で杜詩を典據として使い、且つその出どころを注として明記している。

……

又聞章留後	又聞く章留後
偶向廢寺遊	偶たま廢寺に遊ぶ
世尊亦塵埃	世尊も亦塵埃なり
古殿空颼颼	古殿 空しく颼颼たり
寺僧遇使君	寺僧 使君と遇い
告訴不自休	告訴して自ら休まず
章公顧兵徒	章公 兵徒を顧み
棟宇俾營修	棟宇を營修せしむ（杜甫「同章留後遊山

寺」詩曰、雖有古殿存、世尊亦塵埃。使君
騎紫馬、奉擁從西來。山僧衣藍縷、告訴棟
架摧。公爲顧兵徒、咄嗟檀施開。云云。

……

上に引いた部分は、林工部の善意を古人に喩えて譽め讃えた段落である。李奎報はここで、「杜甫の『章留後に同じく山寺に遊ぶ』の詩に曰く」と、劍南節度使であつた章仇兼瓊の故事が使われた杜甫の「山寺」(原注：得開字章留後同遊、『杜詩詳註』卷十二)詩の大筋だけを注記している。¹⁹⁾

さて、李奎報はこの詩の序文において「即ち和して」、聆首座の要求に應じてその場で即興的に唱和したと記している。杜甫と章留後の關係、すなわち故事を即興的に巧みに用いていることから、彼が普段から杜詩についていかに研究していたかが窺える。²⁰⁾ もちろん、杜甫の詩句や杜甫にまつわる故事を用いるのは自分の學問の水準を示すためでもあつただろうが、彼がわざわざ自注をつけたのは、自分の詩の讀者に杜甫と杜詩について十分な情報を與える必要

があつたからであろう。

これまで考察してきたように、李奎報は杜甫の句法を巧みに真似るのみならず、たとえば杜甫の詩の中に描かれた章留後に關する、傳記的な事柄までも自在に自作詩の中におりこむことができた。李奎報のように杜詩に習熟するには、それ以前の時代のように、詩話などから部分的に杜詩を吸収するだけでは不十分であり、杜甫の詩集そのものに親しむ必要があつたであろう。彼の三十歳前後にあたる十二世紀末ごろには、一部の知識人たちの間で杜詩がすでに學習の對象として定着しており、杜詩を隔々まで讀んでその精髓を自作に活かす詩人も現れ始めていたのである。

3 杜甫の草堂詩への次韻

李奎報の杜甫への關心とその學習においても一つ注目すべきは、彼が杜甫の草堂に關わる三篇の連作詩、計十六首(七言律詩五首、五言絕句六首、五言律詩五首)への次韻を試みたことである。以下、順にみてゆこう。

三篇ある連作詩のうち第一篇の詩題は三篇の序文にあた

る。まず、その詩題を見ると、

辛酉五月、草堂端居無事、理園掃地之暇、讀杜詩、用成都草堂詩韻、書閑適之樂 五首

辛酉五月、草堂に端居して事無く、園を理め地を掃う暇に、杜詩を読み、成都の草堂詩韻を用いて、閑適の樂しみを書く五首（東國李相國全集」卷十）

という。この詩題から分かるように高麗神宗四年（一二〇一）、すなわち彼が三十四歳の頃の作品である。李奎報はこれより早い明宗二十二年（一一九二）、すなわち彼が二十五歳の頃、實際に草堂を構え、周りからも「草堂先生」と呼ばれことがあったのだが、ここにおいては杜甫の草堂詩への次韻を試みたのである。この次韻詩の詩題によれば、杜詩に次韻することによって田園生活の樂しみ、すなわち「閑適の樂しみ」を書き記したのだという。

この連作詩の第一篇は、杜甫の詩「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公」五首（「將に成都の草堂に赴かんとして途中作

有り、先ず嚴鄭公に寄す」五首）（『杜詩詳註』卷十三）に次韻したものである。この杜甫の詩は、廣徳二年（七六四）の春、閬州から成都に歸つてくる途中にあった杜甫が節度劍南として再び成都に戻つてきた嚴武に贈つたものである。まず、杜甫の詩を以下に引こう。

得歸茅屋赴成都

茅屋に歸り成都に赴くことを得るは

直爲文翁再剖符

直ちに文翁の再び符を剖くが爲なり

但使閭閻還揖讓

但だ閭閻をして還た揖讓せしめば敢て論ぜんや

敢論松竹久荒蕪

松竹の久しく荒蕪するを

魚知丙穴由來美

魚は知る 丙穴 由來美なるを

酒憶郫筒不用酤

酒は憶う 郫筒酤うを用いざるを

五馬舊曾諳小徑

五馬舊と曾て小徑を諳んず

幾回書札待潛夫

幾回の書札か 潛夫を待たんぞ

まず、自分が成都の草堂に歸つて來ることができるとは、嚴武のお陰であると感謝の氣持ちを述べ、次に成都草堂の様子を描き、最後は草堂でまた貴方にお目にかかるであろうと結んでいる。この詩は言わば五つの詩の序文に當たり、第二首目以後は草堂に戻ってきた後の周圍の狀況や自身の生活ぶりを語っていく。

さて、これに次韻した李奎報の詩の第一首は次のとおりである。

懶惰無心賦兩都
況堪著論效王符

懶惰にして兩都を賦すの心無きに
況や堪えん 論を著すこと王符に
效うに

緬思潘閔三峯好

緬かに思う 潘閔三峯の好きを

且任陳蕃一室蕪

且つ任す 陳蕃一室の蕪るるを

小塢移花邀客看

小塢 花移りて客を邀えて看る

比隣有酒遣兒酤

比隣 酒有り兒を遣して酤う

何須點檢人間事

何ぞ人間の事を點檢するを須いん
や

高麗朝における杜詩受容（鄭）

出處悲歡命矣夫 出處の悲歡 命なるかな

李奎報の第一首もこれに續く四首の序文のような役割は杜甫と同じであるが、歌い手の心境において杜詩とやや異なっている。杜甫が草堂へ歸ることのできた喜びと嚴武への感謝の氣持ちを歌っているのに對し、李奎報は「何ぞ人間の事を點檢するを須いんや」と、世間から離れざるを得ないのだが、それを自分の運命として受け止め、それによって得られる田園生活の樂しみを歌おうとしている。彼は若い頃から文學的才能を認められながらも、官の道においては自分の思いどおりにはならなかった。この次韻詩が作られる二年前の三十二歳のとき、ようやく全州牧となることができたのだが、長官とのトラブルのため一年半で辭めさせられ、草堂での浪人生活を餘儀なくされ、それをきっかけに閑適の樂しみを見つけようと試みたのである。官の道において杜甫と同じ境遇におかれた李奎報が、杜甫の草堂詩を選んで次韻したその第一首は、もと歌となった杜甫の草堂詩よりはむしろ、杜甫が成都に草堂を構えたばかり

のころ、初めて味わう團樂の喜びを歌った詩のような印象を受ける。

このように李奎報は杜甫の浣花草堂のイメージと押韻の字を借りながらも、もともになる杜詩とは關わりなく、まるで一首の中に自分の世界を描いているように、第五首に到るまで田園生活での閑適の樂しみを歌い續ける。

連作の第二篇は、「又次絶句六首韻」〔東國李相國全集〕卷十〕である。これは杜甫の「絶句」六首〔杜詩詳註〕卷十三〕に次韻したものであり、第一篇と同様、草堂の生活ぶりを歌い續けている。

李奎報の連作の第三篇、「又次新賃草屋詩韻」五首〔東國李相國全集〕卷十〕は、杜甫が大歷二年（七六七）に作った五言律詩「暮春題瀼西新賃草屋」五首〔杜詩詳註〕卷十八〕に次韻したものである。杜甫のこの詩は前の二篇、「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公」五首と「絶句」六首の三年後の作品であり、作った場所も成都ではなく夔州で、その詩に漂う雰圍氣は他の二篇とはかなり異なっている。

杜甫はこの篇の第一首で、「久しく嗟く三峽の客、再び暮

春と期するを」と、戰亂と飢饉を避けて長らく旅人となつて、他郷で再び迎える暮春の悲しみから説き起こしている。最後は終わらない戰亂に對する哀傷の辭で結び、そのやるかたない悲しみをにじませている。一方、これに次韻した李奎報の詩は、前の二篇の次韻詩と同様、樂觀的に田園生活を歌うのである。ここでは本歌と次韻詩の第五首を取りあげて比較してみることとする。まず、杜甫の詩は次のとおりである。

欲陳濟世策	濟世の策を陳べんと欲するも
已老尙書郎	已に老いたり尙書郎
不息豺狼鬪	息まず豺狼の鬪
空慙鴛鴦行	空しく慙ず鴛鴦の行
時危人事急	時危くして人事急なり
風逆羽毛傷	風逆にして羽毛傷わる
落日悲江漢	落日 江漢に悲しみ
中宵戾滿牀	中宵 戾牀に滿つ

若い頃から「君を堯舜の上に致す」(杜詩詳註)卷一「奉

贈韋左丞丈二十二韻」と、政治への強い願望を抱きながらも、いつの間にか老いてしまった自分の姿、いつ治まるかからない戦亂の日々、めでたい暮春に他郷を轉々と漂う旅人の身、そこから生じる悲しみをこの詩は表出している。

いかにも杜甫らしい詩である。これに次韻した李奎報の詩は、

寧爲學稼老 寧ろ稼を學ぶ老に爲るも

恥作出貲郎 貲を出して郎に作るを恥ず

賦食籠狙類 賦食 籠狙の類

忘機入鳥行 忘機 入鳥の行

深藏玉自貴 深く藏すれば玉自ら貴く

不採蘭何傷 採らずんば蘭何ぞ傷つかん

獨喜童鳥輩 獨だ喜ぶ童鳥の輩

踴躍繞我床 踴躍として我が床を繞るを

活への決心を述べている。

以上のごとく、李奎報の次韻詩は、官の道から遠ざけられて草堂での生活を餘儀なくされた時期、同じ境遇におかれた杜甫とその詩に共鳴しながら、杜甫の草堂という素材と韻字を借りて自分の草堂生活での「閑適の楽しみ」を歌っていた。しかし、第三篇の杜甫の「暮春題瀼西新賃草屋」詩は、前の二篇と作られた時期と場所が異なっているにもかかわらず、「閑適の楽しみ」という同一の詩題の下で次韻したため、「又次新賃草屋詩韻」五首は、もとの杜甫の詩とは雰囲気はかなり異なっていた。

現存する文献から見る限り、杜詩への次韻は李奎報がなしたこの一連の草堂詩への次韻が初めての例であり、且つ高麗中期の唯一のものと思われる。では、そもそも當時の詩壇において中國詩人の詩への次韻はどの程度一般的であり、杜詩への次韻は高麗朝の杜詩受容史においてどのような意味を持つのだろうか。

と、相變わらず田園生活での閑適の楽しみを歌い、隱遁生

4 杜詩への次韻の意義

李奎報の文集を閲覧する限り、高麗中期には唱和詩を作ることが文人たちの生活でごく日常的に行われていたことが窺える。幸いなことに、彼は中國の詩人の詩へ次韻するとき、ほとんど「用ゝ詩韻」と、その詩人の名を明記している。このような次韻は彼の三十代に集中しており、中でも彼の三十一歳（一一九八）頃の作品が載せられた『東國李相國全集』卷八に特に多く見られる。この巻には四十一篇五十二首が収められているが、そのうち中國の詩人の韻を用いたと詩題に記されるものが九首、それに唱和したものが五首、計十四首にのぼる。以下、順番にその詩題だけを例挙してみよう。

- ① 「訪寒溪、住老覺師旅寓、用參寥子詩韻贈之」
- ② 「又用東坡詩韻贈之」
- ③ 「天臺玄師聞予訪覺公留飲、携酒來慰、用前韻贈之」

- ④ 「訓長老乞詩、又用前韻」
- ⑤ 「安和寺敦軾禪老方丈夜酌、用東坡韻」
- ⑥ 「復和」
- ⑦ 「明日與二三子登環碧亭、又閱御室。還至別閣小酌、用蘇公詩韻」
- ⑧ 「暮春、同崔博士甫淳、訪尹注簿世儒置酒、用東坡詩韻各賦」
- ⑨ 「復和」
- ⑩ 「又贈尹公」
- ⑪ 「六月一七日、訪金先達轍、用白公詩韻賦之」
- ⑫ 「金君乞賦所飲綠瓷杯、用白公詩韻同賦」
- ⑬ 「初秋、又與文長老訪金轍、用白公詩韻、各賦早秋詩」
- ⑭ 「又用白公韻、賦文長老草履」

これらの詩題からまず挙げられる特徴は、用いられた韻のほとんどが蘇東坡（②）と白居易（⑪）の韻であるということである。この傾向は卷八だけに止まらない。

『東國李相國集』の全體から見ても、蘇東坡の韻を使ったものが最も多く、その次が白居易である。

蘇東坡や白居易の詩への次韻における特徴は、その次韻が主に詩人たちが集まったときに用いられたこと、すなわちこれらの次韻詩はおおやけの場においてグループで行われたことである（特に⑧と⑬）。さらに、一度次韻した詩を友人に與えると、その人からまたそれに次韻した詩が贈られるなど、中國詩人の詩の韻を使った唱和が頻繁に行われていたことも分かる。

蘇東坡詩への高い評價と學習は士大夫の間だけに止まっていなかったようだ。例舉した李奎報の次韻詩だけをみても、寒溪寺の住持老覺師と天臺玄師へ贈った詩（③）、訓長老に求められて作った詩（④）、そして安和寺の敦軾禪老に贈り（⑤）、贈られた詩にまたも和する（⑥）など、彼と僧侶達との唱和詩には主に蘇東坡の韻が用いられている。このように高麗中期の詩壇においては中國の詩人の韻を用いての詩作、つまり和韻詩がかなり流行していたが、次韻の對象としてはとりわけ蘇東坡詩の韻が一番多く使われ

ていた。これは當時の高麗詩壇での蘇詩の流行とも深く関わっていたであろう。

韓國文學史において、高麗中期は「東坡崇尚」の時代といわれてきた。^② 李奎報は若い頃に書いた「答全履之論文書」（『東國李相國全集』卷二十六）の中で、當時の文學と詩壇の動きについて詳しく論じており、その中でも蘇東坡詩への學習に傾倒する様子を次のように語っている。

……且世之學者、初習場屋科舉之文、不暇事風月。及得科第然後方學爲詩、則尤嗜讀東坡詩。故每歲勝出之後、人人以爲「今年又三十東坡出矣」。

……且つ世の學ぶ者、初めて場屋科舉の文を習うに、風月を事とする暇あらず。科第を得るに及びて然る後に方に詩を爲るを學べば、則ち尤も東坡詩を讀むを嗜む。故に毎歲勝出するの後、人人以て「今年又た三十の東坡出づ」と爲す。

規範的な詩文が要求される科舉試験の準備に追われ、自由

に詩を學ぶ暇のなかつた者たちが、その厳しい試験に合格してからようやく本格的に詩の勉強を始めるのだが、皆の學習の對象となるのは蘇東坡の詩であつたという。このため毎年科舉試験の結果が出るたび、「今年もまた三十人の東坡が生まれた」と、當時の人々ははやし立てたという。

この記述は、我々に當時の文壇における「東坡崇尚」の様子を象徴的に示している。實際、高宗二十三年（一二三六）に東坡の文集が新たに彫られたことから、高麗朝でのこうした蘇東坡への傾倒ぶりが窺える。

このように高麗中期の詩壇では蘇東坡の詩がかなり流行し、それによつて前の例からみたように、次韻詩の對象としても彼の詩が一番好まれて用いられていた。

さて、次韻詩の對象として人々に好まれてよく用いられた蘇東坡または白居易の詩に比べると、杜甫詩への次韻は極端に少なく、前に挙げた李奎報の草堂詩への次韻以外には例が見られない。しかも、他の中國の詩人への次韻が詩人たちの集まつた公の場でお互に行われていたのに對し、杜甫の詩への次韻は、李奎報ただ一人で、その内容も自身

の私的なことを歌っている。^{②④}では、高麗詩壇での杜詩と蘇詩への次韻の違いは何を意味するのだろうか。

高麗詩壇での次韻詩における杜詩と蘇詩との差は、まず杜詩と蘇詩の普及率の違いが考えられる。蘇東坡の詩は東坡の生きた時代からすでに高麗朝に傳つており、李奎報の時代にはかなり深く浸透していたこともすでに述べた。

これまで論じてきたように、李奎報以前に杜甫はすでに一部の文人たちの間で最高の詩人として認識され始めてはいたものの、詩話などを介した部分的な受容であつた。このため、次韻の對象として取りあげられる機會はけつして多くはなかつたと考えられる。

もう一つは、蘇東坡の詩はもとより多くの詩が次韻詩として作られ、或いは當時の詩人たちに次韻の對象となつていたこともあつた。しかし、杜甫の詩はもとより次韻詩が作られていなかった。杜甫の時代には相手の詩の意味にあわせ「和」した詩はあつたものの、次韻詩はまだ行われていない。次韻詩が流行したのは中唐の元稹と白居易頃からだといふ。^{②⑤}こうした文學史の流れから見ると、蘇詩とは違

つて、杜詩はもとより次韻の對象になり難かつたことも考えられる。李奎報の文集には白居易以後の晩唐詩人の詩への次韻はよく見られるが、杜甫以前の詩人への次韻は全く見られないことも、こうした文學史における次韻詩の流れと深く關わっているものと思われる。

以上のように、蘇東坡の詩への次韻が流行する詩壇の中で、若い頃から杜詩を熱心に學習してきた李奎報は、官の道から遠ざかれるという杜甫と同じ境遇におかれ、杜甫の草堂生活にもう一度共鳴して次韻を試みたのであろう。また草堂での「閑適の樂しみ」を歌うのに、わざわざ杜甫の成都以後に作られた近體詩、つまり五言・七言の律詩と五言絶句の中から、連作を選んで次韻していたことからは、彼が杜甫に比して自分の詩才を試していたかのように思われる。言い方を換えれば、李奎報の杜詩への次韻詩は、當時詩壇での蘇東坡詩への傾倒から脱却し、他の詩人に先立つて杜詩學習への新たな試みとして作られた詩でもあったと言えるだろう。

杜甫への次韻詩が、現在見られる文獻では李奎報の後しばらく現れず、高麗朝後期（二二六〇―一三九二）の李穀（一二九八―一三五二）になって、「人日讀杜詩仍用其韻」（『稼亭先生文集』卷十八）と、再び現れ始める。それ以後、鄭樞（一二三三―一三八二）などによって杜詩の韻はよく用いられ、朝鮮王朝に入ってから杜詩は、政治的な文學政策によって廣く普及すると共に、杜詩への次韻もより頻繁に行われる。

最後に、ここで李奎報が用いた杜詩のテキストを問題にする必要がある。李奎報が次韻した杜甫の三篇十六首は、當時すでに高麗朝に伝えられたことが確認された『文苑英華』の杜詩二百餘首の中には收められていないことから、彼は次韻するに當たつて杜甫の別集を用いたと思われる。李奎報は杜甫の草堂詩へ次韻する以前からも、前に挙げたように幾つか杜詩の詩句を引いていたが、草堂詩へ次韻を行つた時點において、杜甫の別集の傳來が確認できたと言える。^②

しかし、李奎報が次韻のとき用いた杜甫の詩集がどのよ

うな版本であつたのかは確定できない。ただ、この三篇が高麗神宗四年（一二〇二）の作であることから、時期的にはこの次韻詩の以降に編まれた『杜工部草堂詩箋』、または『集千家註』等は考えられない。それ以前に編纂された主な杜詩集としては、王洙の『杜工部集』を始め、趙彥材校定の『趙次公集註杜詩』と郭知達編の『九家集註杜詩』などが擧げられる。その中でも北宋の嘉祐四年（一〇五九）にすでに官刻本として刊行され、廣く流布された王洙と王琪による『杜工部集』二十卷本が、それに基づくテキストが傳つた可能性が最も高い。ついでに、『九家集註杜詩』には李奎報が次韻した三篇十六首の詩が、彼の引いた同じ順番で卷二十五、二十六、二十八に、宋本の『杜工部集』には卷十三、十三、十四に、それぞれ收められている。

結 び に

今日、目にすることができる韓國の文獻では、杜甫にかかわる記述が十二世紀の半ば頃に初めて見られる。それ以後、杜甫の名と杜詩句が頻繁に取りあげられるようになり、

高麗前期には杜詩が受容され始めていたことをもの語っている。しかし、杜甫にかかわるそれらの言及は、すでに北宋の文人の記録にも見え、詩話や個人文集などの二次的な媒介を通じた間接的な受容であつたと言える。

高麗中期の李奎報に至ると、彼以前の詩人たちとは違って、杜甫の詩集を讀んでいた具體的な様相が窺える。彼は、杜甫の表現技巧を學び、時には杜甫の詩句を意識的に眞似て實作に應用していたことが分かつた。また卽興的な詩作の場面においても杜甫の詩句から故事を引いて詩を作り、蘇東坡詩への學習に傾倒する當時の詩壇の中にあつて、杜甫の一連の草堂に關わる詩三篇十六首への次韻を試みた。杜詩受容にかかわる李奎報の作品は、彼の三十歳前後に作られたもので、十二世紀末頃には杜詩が高麗朝の一部の詩人たちの間ですでに學習の對象として受容され始めていたことが分かつた。

しかし、李奎報が杜詩を用いて箇所にわざわざ注を付けて記したことからすると、杜甫の詩が高麗詩壇に深く浸透していたとは言い難い。また蘇東坡の詩への次韻が頻繁

に、しかもグループで行われていたに比べ、杜甫の詩への次韻は李奎報が爲した十六首以外には見られず、杜甫の詩の普及は蘇東坡の詩に及ばなかったことは明らかである。

杜詩は以後、高麗詩人たちの間に次第に廣がり、十三世紀半ば頃の崔滋は、「詩を言いて杜に及ばざるは、儒を言いて夫子に及ばざるが如し」（『補閑集』卷下）と、杜甫を詩學の規範たる詩人として孔子になぞらえ、「詩聖」の地位にまで高めた。ただ、實際の杜詩受容においては、「一好事者有りて……曰く、彼の雄深奇妙、古雅宏遠の句は、必ず反覆詳閲し、久しくして後に味を得る、故に學ぶ者悦ばず、工部の詩の如きの類なり」（『補閑集』卷下）と、詩話での表面的な評價とは違って、一般の文人たちの間では杜詩學習の難しさによる敬遠も存在したようだ。北宋以後杜詩の註釋書がたくさん編まれたのも、杜詩が本来持つこのような字句の難解さから生まれたもので、高麗朝にも傳わったはずである。が、高麗文人に利用されたテキストがどのようなものであったかは、文獻資料の不足もあり、當分正確な結論に至るのは難しそうだ。

高麗朝における杜詩受容（鄭）

中國から文化を受け入れ、獨自の文化をつくり上げてきた日本と韓國であるが、個別的な文學作品の受容の仕方においては必ずしも同じではなかったようだ。特に韓國と日本での杜詩受容においては、時代的または政治的環境の相違によって異なるところが多い。今後、日韓の杜詩研究者たちの共同研究によつて、兩國における杜詩受容の様相がより総合的な視點から行われることを期待する。

註

① 「宣宗二年、宋哲宗立、遣兩使、奉魏致賀、請市刑法之書、太平御覽、開寶通禮、文苑英華。惟賜文苑英華一書。」（『增補文獻備考』卷二百四十二、「藝文考」）

② 李仁老の『破閑集』は高麗熙宗七年（一一二一）に編纂された韓國最初の詩話集である。崔滋の『補閑集』は高宗三十六年（一二四九）に武士政權の要請に應じ、『破閑集』を補うために編纂された。兩詩話とも宋の詩話からの影響が數多く見られるが、中でも杜詩にかかわる評價においては、北宋での杜詩評價をそのまま踏襲しているところが多く、實際の高麗朝詩壇における杜詩受容の資料として扱うには多少問題がある。今まで、高麗朝の杜詩受容の問題を取りあげ専門的

に論じた研究は見られず、主に朝鮮王朝における杜詩受容を對象に研究が行われた。その中で、李昌龍の『韓中詩の比較文學的研究——李白・杜甫に對する受容様相——』（ソウル、一志社、一九八四）、全英蘭の『韓國詩話中有關杜甫及其作品之研究』（臺灣師大博士學位論文、一九八九）、李立信の『杜詩流傳韓國考』（臺北、文史哲出版社、一九九一）などは、高麗朝での杜詩受容の様相に關して觸れているものの、主に詩話からの資料を再引用するに止まっている。

③ 「三國以前、未有科舉之法。高麗太祖、首建學校、而科舉取士未遑焉。光宗用雙冀言、以科舉選士、自此文風始興。大抵其法、頗用唐制。」（『高麗史』卷七十三「選舉志」）

④ 「成宗十四年春二月己卯教曰、……予恐業文之士、纔得科名、各牽公務、以廢素業。其年五十以下、未經知制誥者、翰林院出題、令每月進詩三篇、賦一篇。在外文官、自爲詩三十篇、賦一篇、歲抄附計吏、以進翰林院、品題以聞。」（『高麗史』卷三「成宗世家」）

⑤ 北宋の蘇頌が元豐二年（一〇七九）に作った「己未九月、予赴鞠御史、聞子瞻先已被繫、予……」（『蘇魏公文集』卷十）の詩に、「詞源遠遠蜀江流、風韻琅琅舜廟球。擬策進歸中御府、文章傳過帶方州」（前年高麗使者、過餘杭、求子瞻瞻集以歸）。……と、自注に高麗朝使者が蘇軾の文集を買い求めて歸つたと記している。蘇頌のこの記述によると、元豐一年（一〇七八）には蘇軾の詩文の一部がすでに高麗朝に傳

わつたことになる。また北宋の徐兢が宣和六年（一一二四）に高麗へ使行したときの記録に、當時高麗朝の代表的文人金富軾（一〇七五—一一五一）と彼の弟富轍の作名について、「……嘗密訪其兄弟命名之意、蓋有所慕云。」（『宣和奉使高麗圖經』卷八「人物」）とあり、宋の蘇軾・蘇轍兄弟の名に擬して作名したようだ。これらの文獻の記事から、高麗文人の北宋詩壇への關心とその情報傳達の速さがうかがえる。

⑥ 「予考古之詩、尤愛杜甫氏作者。其詞所從出、一莫知窮極、而病未能學也。」（『臨川先生文集』卷八十四「杜工部後集序」）

⑦ 「若夫發於情、止於忠孝者、其詩豈可同日而語哉。古今詩人衆矣、而杜子美爲首、豈非以其流落飢寒、終身不用、而一飯、未嘗忘君也歟。」（『東坡集』卷二十四「王定國詩集敘」）

⑧ 「杜子美之於詩、實積衆家之長、適其時而已。……孟子曰「伯夷、聖之和者也。伊尹、聖之任者也。柳下惠、聖之和者也。孔子、聖之時者也。孔子之謂集大成。」嗚呼、杜氏、韓氏、亦集詩文之大成者歟。」（『淮海集』卷二十二「韓愈論」）

⑨ 中國における杜詩の受容に關する資料集としては、華文軒編『古典文學研究資料彙編・杜甫卷』（中華書局、一九六四）を參照。北宋の杜詩受容に關する詳しい研究書としては、許總著『杜詩學發微』（南京出版社、一九八九）がある。

⑩ 杜詩のテキストの刊行及び流傳については、周采泉著『杜集書錄』（上海古籍出版社、一九八六）を參照。

⑪ 朴公襲の生没年代は未詳だが、『高麗史』卷二十の明宗二十三年（一一九三）の記事に將軍として名が見える。また彼の詩文は、『東文選』では林宗庇（一一四二の進士）のすべ次に配列され、主に十二世紀後半に活躍した人物だと思われる。

⑫ 吳廷碩の詩は『東文選』の律詩では林宗庇の次に、絶句では權適（一一〇九四―一一四六）の次と林宗庇の前に配列されていることから、十二世紀半ばころに活躍した詩人であることが分かる。

⑬ 唐の鄭谷「蜀中賞海棠」詩に、「濃澹芳春滿蜀郷、半隨風雨斷鶯腸。浣花溪上堪惆悵、子美無心爲發揚」（『杜詩補註』卷上「諸家詠杜」所收）とある。

⑭ 宋の李頎の『古今詩話』に、「杜子美母名海棠、子美諱之、故杜集中絕無海棠詩。」（『詩林廣記前集』卷二引）とある。

⑮ 官の道に恵まれず一生不遇で終わつた林椿は、詩の中で「杜陵身窮更遭亂、未免負薪常自採」（『西河集』卷三「奉寄天院洪校書」と、同じ境遇に置かれた杜甫の「窮」の面をよく取りあげて歌つた。

⑯ 陳師道の『後山詩話』に、「蘇子瞻云、子美之詩、退之之文、魯公之書、皆集大成者也。學詩當以子美爲師、有規矩、故可學。」（何文煥『歷代詩話』上所收）とある。

⑰ 本稿での李奎報の文集『東國李相國集』五十三卷（全集四十一卷、後集十二卷）は、影印標點『韓國文集叢刊』（民族

高麗朝における杜詩受容（鄭）

文化推進會、一九九〇）本を用いる。

⑱ この部分は徐居正（一四二〇―一四八八）の『東人詩話』でも、「詩不踏襲、古人所難、李文順平生自謂、「擺落陳腐、自出機杼。如犯古語、死且避之。」然有句云、「黃稻日肥雞鶩喜、碧梧秋老鳳凰愁」、用少陵「紅稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝」之句。……以李高才尙如是、況不及李者乎。」と、李奎報が杜甫の詩句を踏襲していた例としてすでに指摘された。

⑲ 李奎報の詩に引かれた部分のものと杜甫の「山寺」詩は、「雖有古殿存、世尊亦塵埃。如聞龍象泣、足令信者哀。使君騎紫馬、捧擁從西來。樹羽靜千里、臨江久裴回。山僧衣藍纈、告訴棟梁摧。公爲顧賓從、咄嗟檀施開。」となり、中の四句が省略されて記されたことが分かる。

⑳ このほか李奎報が使った杜詩の句を注に記した例を挙げる
と、「北閣斜衝道、南山走裂坤」（杜詩云「附入裂厚坤」）
（『東國李相國全集』卷五「李讎校見和、復次韻答之」）は、
杜甫の「木皮嶺」（『杜詩詳註』卷九）から（ただ、もとの杜
詩句は「仰于塞大明、俯入裂厚坤」となり、李奎報の詩での
「附」の字は「俯」の字の間違ひであろう）、「我是諸生憲
（杜詩云「諸生原憲貧」、嘗于太尉憲」（『東國李相國全集』
卷七「上崔平章謙并序」）は、杜甫の「寄李十二白二十韻」
（『杜詩詳註』卷八）からそれぞれ引いている。

㉑ 「白雲居士語錄」……或目以爲草堂先生、予以子美之故、

讓而不受。」(『東國李相國全集』卷二十)

②② 朝鮮前期の徐居正は高麗文學に對して、「高麗文士、專尙東坡」(『東人詩話』)と評し、また金宗直(一四三一—一四九二)も、「麗之中葉、專學東坡」(『靑丘風雅序』)と、高麗中期は専ら蘇軾の詩を學んだと指摘した。

②③ 李奎報は「全州牧新雕東坡文集跋尾」で、「夫文集之行乎世、亦各一時所尙而已。然今古已來、未若東坡之盛行、尤爲人所嗜者也。豈以屬辭富贍、用事恢博、滋液之及人也、周而不賈故歟。自士大夫至于新進後學、未嘗斯須離其手、咀嚙餘芳者皆是。其摹本舊在尙州、不幸爲虜兵所焚滅。」(『東國李相國全集』卷二十一)と記している。

②④ 杜詩への次韻のほか、李奎報が個人的な感情や閑適を歌うために古人の韻を用いたものには、彼の末年頃(一二三七年)白居易の詩へ次韻した「次韻和白樂天病中十五首」がある。彼はその序に、「……噫。才名德望、雖不及白公遠矣。其於老境病中之事、往往多有類予者、因和病中十五首。以紓其情」(『東國李相國後集』卷二)と、その旨を記している。李奎報の白居易の詩への唱和詩については、金卿東の「白居易和高麗文人의 唱和詩研究序說——唱和詩復原에 관한諸問題를 중심으로」(『中國文學研究』二十七集、二〇〇四)がある。

②⑤ 「古來但有和詩、無和韻。唐人有和韻、尙無次韻。次韻實自元白始、依次押韻、前後不差、此古所未有也」(清・趙翼

『甌北詩話』卷四)

②⑥ 鄭樵の『圓齋先生文稿』卷上には、「元内書用老杜韻、賦松柳見示、卽次韻」、「次牧隱學士用老杜甫韻」、「次韻李牧隱學士用老杜甫韻」等の詩題が見える。

②⑦ 高麗高宗(一二一四—一二五九)の時に翰林諸儒が作った樂章歌詞「翰林別曲」の中でも、「唐漢書、莊老子、韓柳文集、李杜集、蘭臺集、白樂天集……」(『高麗史』卷七十一「樂志二」と、杜甫の詩集が取りあげられている。